

研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2007～2011
課題番号：19520329
研究課題名 (和文) コリマ・ユカギール語の記述言語学的研究

研究課題名 (英文) Descriptive Study of Kolyma Yukaghir

研究代表者

長崎 郁 (NAGASAKI IKU)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：70401445

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：基盤研究(C)

キーワード：コリマ・ユカギール語、シベリア、ロシア、危機言語、記述言語学

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、北東シベリアのコリマ川上流域で話されているコリマ・ユカギール語について、現地調査を含む資料の収集と整理を通じ、文法の記述を行うことである。具体的には以下のような研究を期間内に行う。

(1) 動詞の形態法、非定形動詞の機能、倚辞 (小詞) の分類と用法といった、これまでの研究において明らかにされていないトピックをとりあげ、分析を進める。これは、既存の資料のみならず、現地調査による新たな資料に基づいて行われるものであり、記述研究の歴史の浅いコリマ・ユカギール語の文法現象をより深く解明しようという試みである。

(2) 言語資料の中でも、民話や伝説といったテキストの記録・録音と整理を進め、その成果を公開する。同時に、既存の資料についてもコンピュータ上で検索が可能なように電子化を進める。このような言語資料は、言語学以外の諸分野、すなわち口承文芸学、民族学、文化人類学といった幅広い研究分野でも基礎資料として重要な価値を持つものと考えられる。また、コリマ・ユカギール人のコミュニティでは民族語教育が開始されるなど言語・文化の復興運動が進められているが、言語資料を公開することは、このような動きに対する研究者側からの社会的貢献となると考えられる。

2. 研究の進捗状況

(1) 現地調査について

2007年度、2008年度、2009年度ともに現地調査を行い、資料の収集とネイティブスピーカーからの聞き取り調査、コリマ川上流域の少数民族の言語状況に関する調査を行った。

(2) 資料の整理について

① 上記(1)の現地調査で録音・記録した資料に、SIL International で開発・公開されているコンピュータソフトウェア、Toolbox を用い、メタデータ/アノテーションを付与する作業を行っている。これまでの調査で収集された資料に関しては、日本語での作業はほぼ完了しており、現在はその英語化およびロシア語化を進めている。

② 国外で出版された次のような民話資料の電子化を進めている。

(A) Jochelson, Waldemar (1900) *Materialy po izucheniju jukagirskogo jazyka i fol'klara*, Sankt-Petersburg.

(B) Jochelson, Waldemar (1926) *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*, Leiden: E.J. Brill.

(C) Maslova, E. (2001) *Yukaghir Texts*, Wiesbaden: Harassowitz Verlag.

(D) Maslova, E. (2003) *A Grammar of Kolyma Yukaghir*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter. (巻末付録)

前年度までにスキャン画像としてコンピュータに取り込む作業を終了した。今後はこれらのテキスト化を行う予定である。

(3) 文法記述について

資料の整理を進めると同時に、それをコーパスとして以下のようなトピックに関する記

述研究を行った。

- ① 2007年度 - 倚辞の特徴とその分類をとりあげ、長崎 2007 (「コリマ・ユカギール語の倚辞について」) として成果を発表した。
- ② 2008年度 - コリマ・ユカギール語の形態論に関する包括的な記述を行い、長崎 2009 (「コリマ・ユカギール語の記述研究 - 形態論を中心に -」) として成果を発表した。また、上記研究の一部を一般向けの図書『ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣人たち』(白水社、「ユカギール語の世界」の執筆を担当) として発表した。
- ③ 2009年度 - 関係節における動詞形式の使い分けについてとりあげ、日本言語学会第138回大会において研究発表を行うとともに、長崎 2010 (「コリマ・ユカギール語の関係節における3種類の分詞」) としてまとめた。また、いわゆる名詞句外所有構文について日本言語学会第139回大会において研究発表を行った。

3. 現在までの達成度

② おおむね順調に進展している。
(理由) 当初の目的のひとつである文法記述については、年度ごとに異なるトピックをとりあげて分析を行い、一定の成果を上げることができている。また、現地調査で得られた資料と国外で出版された資料の整理については、研究開始後、比較的早くどのようなソフトウェアやデータフォーマットを用いるか決定することができたため、作業は順調に進んでいる。しかし、当初は4年間で計10~12ヶ月の現地調査を行う計画であったが、実質的には研究開始後3年間で現地調査を行うことができた期間は2ヶ月半である。長期滞在が困難になった理由として、ロシアでのビザ取得が困難になったこと、ロシア国内での物価の上昇、ネイティブスピーカーの高齢化が挙げられる。

4. 今後の研究の推進方策

文法の記述、および言語資料の整理を行い最終的には研究成果として公開する、という当初の研究計画は基本的に変わるところがない。本年度は、前年度にひきつづき所有表現や非定形節といったトピックをとりあげ、言語の記述を進めるとともに、テキスト集出版のベースとなるべく、資料整理の作業も引き続き進める。ただし、先に述べたとおり、現地調査の実施期間は本年度も1ヶ月程度にせざるを得ない。そのため、本研究で得られた資料の量は当初の見込みよりも少なからざるを得ない。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の関係節における3種類の分詞」、『環北太平洋の言語』第15号、17-30、2010年、査読無
2. 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の記述研究 - 形態論を中心に -」、千葉大学社会文化科学研究科提出博士論文、1-413、2009年、査読無
3. 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の倚辞について」、『アジア・アフリカの言語と言語学2 (特集 クリティックの諸相)』、29-48、2007年、査読有、
<http://repository.tufts.ac.jp/handle/10108/51089>

〔学会発表〕(計2件)

1. 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の名詞句外所有構文について」、日本言語学会第139回大会、2009年11月28日、神戸大学
2. 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の関係節における3種の分詞の用法」、日本言語学会第138回大会、2009年6月20日、神田外語大学

〔図書〕(計1件)

1. 中川裕 (監修) / 月田尚美・丹菊逸治・李林静・小野智香子・江畑冬生・長崎郁・永井佳代・塩谷亨、白水社、『ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣人たち (CD付き)』、2009年、104-123 (全162頁)